ミャンマーで展示会

畜産輸出協が和牛PR

日本畜産物輸出促進協議会は11月24～26日、ミャンマー・ヤンゴン市で行われた「ミャンフード2016」で和牛のプロモーションを実施。メンバーとしてミートコンパニオン、伊藤ハム、エスフーズが参加した。

「ミャンフード2016」はレストラン、ホテル、スーパーマーケット、輸入業、トレーダーなどに携わる数多くの専門家が参加する同国最大の国際展示会。300以上のブランドや製品が展示されるほか、調理のプロによる実演や料理企画、ホスピタリティーイベントなども実施され、8千人以上が来場する人気の展示会だ。

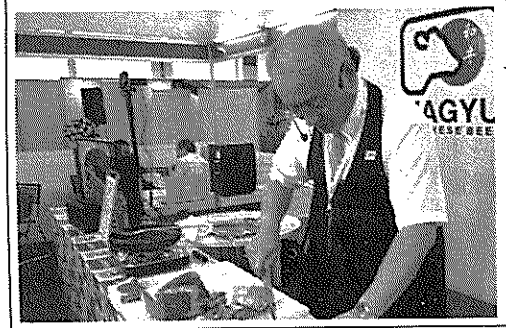
同協議会のブースは8小間（72平方メートル）でステージも併設されており、期間中は和牛の特長などに関する講演、調理実演、ポスター展示や資料配布、さらに試食や情報交換が行われた。

中央畜産会の南波利昭副会長は開会のあいさつで和牛統一マーク、豪州産WAGYUとの違い、和牛の正しい知識の普及や啓もうに触れながら和牛肉の魅力について詳しく説明。また、和牛のカットセミナーと調理実習はミートコンパニオンの植村光一郎常務取締役が行い、ロイン3点と三角バラを使用して実演した。

リブロースのステーキやすき焼き、サーロインのカットステーキや焼き肉、ヒレのシャトーブリアンステーキやダイスカットステーキ、三角バラの焼きしゃぶや牛丼などに商品化され、その場で調理、来場者に試食として振る舞われた。同協議会のブースはつねに人だかりができる盛況ぶりで、試食振供は5千食を超えるなど、現地での和牛への関心の高さがうかがえた。

また、来場者にいままでにない和牛肉の味を体感させたとして、展示会主催者から300にのぼる出展品目の中から最高賞として「Best at show Award 2016」が授与された。

カット、調理の実演を行った植村常務は「ヤンゴンの発展は驚くほど速く、充実した開発区が整備されている。将来はタイをハブとした陸路の完成を想像すると、生産基地としての発展が期待される。大きな和牛肉マーケットになることを確信した」と語った。



調理実習を行うミートコンパニオンの植村常務

創業1887年
鎌倉ハム
S印
☎(052)442－1121

国でも

確認されたわけではない。

農水省は11月28日夜から29日にかけて、新潟県と青森県で高病原性鳥インフルエンザの疑似患畜を確認したと発表した。

新潟県によると、同県関川村で発生した高病原性鳥インフルエンザが疑われる事例について、「H5亜型」の遺伝子が確認されたとし、対象施設の鶏約31万羽を殺処分するとした。青森県の事例についても、同農場で飼育されているあひる、およそ1万6500羽すべてを殺処分するとしている。

農水省は11月25日、スウェーデンからの生きた家禽、家禽肉などの輸入停止措置を講じた。経緯は、スウェーデンの採卵鶏農場で、高病原性鳥インフルエンザ（H5N8亜型）の発生が確認されたと、24日夜、スウェーデン家畜衛生当局から発表があった。過去3年間、スウェーデンからの生きた家禽および家禽肉などの輸入実績はない。

なお、発生国または地域から生きた家禽、家禽肉などの輸入を停止するのは、生きた家禽がウイルスに感染することを防止するためであり、食品衛生のためではない。

韓国農林畜産食品部（キム・ジェス長官）は11月21日、全羅北道金堤市で疑い事例として申告された肉用あひるについて農林畜産検疫本部で精密検査を実施した結果、24日に高病原性鳥インフルエンザ（H5N6亜型）と最終確定したと明らかにした。

農林畜産食品部および全羅北道は22日、当該農場で飼養されているあひる1万6700羽について、予防的に埋却処理し、同農場を中心に防疫区域を設定して、移動制限、拠点消毒施設の設置・運営などの緊急防疫措置を実施している。

農林畜産食品部は鳥インフルの追加発生防止のために、家禽農場や関連従事者に対し、消毒の徹底、部外者・車両の出入制限などの遮断防疫に万全を期すよう要請した。